

2026.6.6 – 2026.6.15

オハイオ州立大学 留学報告書

福島県立医科大学 医学部 6 年 伊藤幸太郎

1. はじめに

この度、福島県立医科大学 放射線腫瘍学講座による多大なるご支援のもと、アメリカ合衆国オハイオ州コロンバスに位置するオハイオ州立大学（The Ohio State University: OSU）にて、海外留学・臨床実習の機会をいただきましたので、ここにその成果と体験を報告いたします。

近年、がん治療における放射線療法の重要性は世界的に高まっており、治療技術の進歩は目覚ましいものがあります。我が国でも放射線を用いた治療の普及が進んでいますが、医療先進国である米国、特に全米でも屈指の規模を誇る総合がんセンター（James Cancer Hospital and Solove Research Institute）を擁するオハイオ州立大学が、どのような最先端医療を展開しているのかを肌で体感することは、将来の医療を担う身として極めて有意義であると考えました。

最先端の放射線腫瘍学における治療戦略、特に強度変調放射線治療（IMRT）や陽子線治療の実際の運用を学ぶこと、そして日米の医療体制の違いを比較考察し、国際的な視野を養うことを本留学の主な目的としました。

2. オハイオ州立大学における放射線治療の実際

オハイオ州立大学の放射線治療を行う現場に足を踏み入れて最も驚かされたのは、その圧倒的なスケールと、高度な技術が日常の臨床現場に完全に溶け込んでいる点でした。

留学期間中、私は画像誘導放射線治療（IGRT）や呼吸性移動対策を講じた高精度治療のプロセスを数多く見学させていただきました。OSU では、最新のシミュレーション技術や MRI ガイド下放射線治療などのデバイスを駆使し、腫瘍に対しては根治的な高線量を照射しつつ、正常組織へのダメージを最小限に抑えるといった個別化された治療計画が策定されていました。

また、治療計画の立案だけでなく、医学物理士や診療放射線技師が主導する品質管理（QA: Quality Assurance）の現場にも立ち会う機会を得ました。いかに優れた治療計画であっても、それが正確に患者に照射されなければ意味がありません。徹底されたダブルチェック体制や、毎日の機器の校正（Calibration）の正確性を目の当たりにし、放射線治療が極めて緻密な工学、物理学、そして医療の融合によって成り立っていることを再認識いたしました。

3. 米国の医療における多職種連携

米国の医療の大きな特徴の一つとして、高度に専門分化された職種がプロ意識をもって連携する「チーム医療」が挙げられますが、OSU のがん治療においてはそれが理想的な形で具現化されていました。

日々の診療では、放射線腫瘍科の医師だけでなく、看護師、医学物理士、診療放射線技師、さらには各専門領域のスタッフが緊密に連携している姿を間近で拝見しました。そこでは、各領域のプロフェッショナルがそれぞれの専門的知見から、患者一人ひとりの病状や治療計画、あるいは生活背景にまで目を配り、最善の医療を提供するために自分の役割に強い誇りと責任を持って診療されていました。

個々の専門性を研ぎ澄ましつつも、職種の垣根を越えて対等に意見を交わし合う姿勢はどのスタッフも共通しており、このプロ意識に裏打ちされた多職種連携の緊密さこそが、米国における質の高いがん医療の根幹をなすものであると強く感銘を受けました。

4. 生活・文化的な体験とコミュニケーションの壁

コロンバスでの生活は、医学的知見の習得だけでなく、人間性の面でも私を大きく成長させたと感じています。

渡米当初は、医療現場独特のスピード感や、ネイティブスピーカーによる専門用語を交えた英語のコミュニケーションに圧倒され、自分の意思を十分に伝えられないもどかしさを感じることがありました。さらに言えば、病院外での何気ない日常会話においては、毎日自分の英語力の未熟さを痛感する日々でした。先生方やスタッフ、指導医の先生方は常に温かく耳を傾け、丁寧に解説してくださいました。

また、大学のキャンパスや街の広大さ、多様な文化的背景を持つ人々が互いを尊重し合って暮らすアメリカの社会を体験できたことは、視野を大きく広げるきっかけとなりました。言葉や文化の壁を乗り越えて信頼関係を築くという経験は、将来どのような背景を持つ患者さんに対しても、真摯に向き合うための基盤になると確信しています。

5. おわりに

今回のオハイオ州立大学への留学は、最先端の放射線治療学を学ぶという当初の目的を遥かに超え、医療人としての心構え、国際的なコミュニケーション能力、そして能動的に議論に加わっていく主体性といった自らの課題を明確にする点において、極めて実り多きものとなりました。

OSU で見聞した高精度放射線治療の知見や、徹底されたチーム医療のあり方、そして何より現地の医療従事者が持つ高いプロフェッショナリズムは、今後の私の医師としてのキャリアにおいて揺るぎない道標となります。ここで得た経験を自分一人のものにとどめず、今後の日本の医療現場、そして目の前の患者さんへの還元という形で体現できるよう、日々の学業および臨床研修にいっそう邁進する所存です。

最後になりますが、このような大変貴重な挑戦の機会を与えてくださり、出発前から滞期中に至るまで多大なるご支援・ご指導をいただきました放射線腫瘍学講座の諸先生方、国際交流センターの皆様、そして現地で温かく迎え入れてくださったオハイオ州立大学のスタッフの皆様に、心より深く感謝申し上げます。